研究論文

大英博物館の風流踊図屏風について

《キーワード》狩野内匠　狩野孝信　亀屋栄任　慶長内裏

川本桂子

はじめに

ここにとり上げるのは、かつては「免税踊図」（"Dancing in Celebration of Tax Remission"）の名で呼ばれていた六曲一隻の中屏風（図1）である。この風変わりな名称は、「慶長　免税踊」という付箋が、屏風の裏に貼ってあるところから生まれたもののようだが、武田恒夫氏が、一九六九年の『在外秘宝　障屏画・琳派・文人画』の「洛中風俗図」解説[1]で、屏風の左側に描かれているのは「免税踊」――「秋の収穫に対する年貢御免の報恩のために、農民たちが催した赦免地踊」ではなく、十六世紀に京中で大流行した「風流踊」であると指摘されて以降、「洛中風俗図」とか「洛中風流踊図」の名に改められた[2]。その後、一九八七年の『秘蔵浮世絵大観　第一巻　大英博物館Ⅰ』[3]では、「洛中邸内風流踊図屏風」（"Dancing Scene at a Kyoto Estate"）の名称が採られたが、これは「邸内」を加えることで、野外における風流踊を描いた作品と区別したためと思われる。そして一九九二年の『秘蔵日本美術大観　第一巻　大英博物館』[4]や一九九六年に千葉市立美術館・福島県立美術館・名古屋市立博物館・宮崎県立美術館を巡回して開催された「大英博物館肉筆浮世絵名品展」の図録[5]においてもこの呼び名が継承されている。

さて、十六世紀の京都では、町衆や公家や武家の張行する風流踊が大流行し、さまざまに趣向を凝らした踊りの集団が、公武の邸や将軍邸から内裏にまで押しかけて互いに踊りを掛け合う[6]という情景が日常的に繰り広げられていた。狩野長信の花下遊楽図や神戸市立博物館とサントリー美術館の花下遊楽図は、この風流踊を描いた作品として有名だが、それらはいずれも野外における風流踊を描いたもので、『言継卿記』等の文献史料にしばしば見られる、公武の屋敷に参入した風流踊を描いた作例は、実はこの屏風以外には知られていないのである[7]。そのためか本屏風（以下本論中では「大英本」と呼ぶ）は、芸能史研究の側からもおおいに注目され、これを絵画

資料として使って、当時の風流踊の芸態や装束・扮装を読み解こうという研究も出されている。[8]

それに対して、美術史からの「大英本」へのアプローチは、海外にある作品ということもあってか、作品の紹介と解説にとどまり、個別の踏み込んだ研究はほとんどなされていない（これまでの「大英本」に関する主な解説・言及等は、文献リストを参照されたい）。

筆者は一九九四年から翌年にかけて、ロンドン大学のＳＯＡＳ（School of Oriental & African Studies）に滞在したが、その折に毎週通った大英博物館で本屏風を詳しく調査させて頂く機会を持った。そして一九九四年秋のＳＯＡＳの研究会で一度この屏風について口頭発表したことがあり、制作年代や筆者問題についても若干言及した。帰国後もう少し詰めて発表しようと思っている間にはや十数年の歳月が流れてしまった。

落款も印章もない屏風ではあるが、武家衆の警護するなか、三棟の立派な御殿の縁で風流踊を見物する男女は、どうみても皇族の男女としか見えず何らかの歴史的出来事を伝えているように思えた。また、本図の作風や構図は、狩野孝信筆とされる洛中洛外図屏風（吉川観方旧蔵、福岡市博物館蔵）（図２）にきわめて近く、その影響下にあった狩野派系の絵師の作ではないかと推測した。この考えは今も変わっていない。そこでこの小論では、この屏風について、筆者が十五年前から考えていることを述べたいと思う。

一、屏風の概要

まず本屏風の形状と外観について簡単に触れておこう。「大英本」は、竪が一〇三・一センチ、横二八〇・二センチの金地濃彩の中屏風で、地面と雲には三寸（十センチ余り）角の、幾分小ぶりな金箔を押している。本紙の縁周りは、桜や牡丹・萩などの植物の花や葉を「縫い（刺繍）」で浮き上がらせた豪華な仕立てで、黒漆の屏風枠には「丸に抱き沢瀉」紋の金具が打ってある。この紋を使った家門としては、下総・結城藩七万八千石の大名水野氏以下二十数家が知られているが、[9]どこと特定できる材料はなく、今はある時期の「大英本」の所蔵者の紋として記録しておくにとどめる。なお、大英博物館の館蔵になったのは一九六一年と比較的新しいが、入手経路や伝歴等はよくわかっていない。

図様は、向かって左半分に、さる洛中の邸内――私は後で述べる理由で、内裏の紫宸殿の南庭のつもりで描いていると思うが――で繰り広げられている盛大な風流踊とそれを見物する貴賤男女をとらえ（図３）、右半分には、二階建ての商家や町家が軒を連ねる洛中の街並みと往来を行く人々を描いている（図４）。上京下京の洛内と洛外の東山・北山・西山をくまなくパノラマ的に描いた通常の洛中洛外図とはちがって、内裏の一角と商家の並びのみを取り出した洛中洛外図の一変奏、ピックアップ版とでも言うべき体裁となっている。現在はこの六曲一隻しか伝わらないが、構図から見て、当初は右に続くもう片隻があったかと思われる。[10]

二、「大英本」の主題

「大英本」の主題はなんといっても左半分で繰り広げられている華麗な風流踊（図5）である。こうした芸能を高貴な人々が見物するという図式は、観能図（神戸市立博物館）や花下遊楽図（東京国立博物館）、阿国歌舞伎図（京都国立博物館）にも見られるところだが、「大英本」の特徴は、左半分の風流踊と右半分の商家の町並みが等分の比重で描かれていることであろう。このことは、左の風流踊の集団が、右側の商家や往来人と深い関わりがある、つまり町衆の組織した踊りであることを暗示している。

周知のように、風流踊は、正月や盂蘭盆会の芸能として発生したもので、鉦や笛・鼓・太鼓などの拍子物にあわせて、仮装したり、風流の造り物を身につけるなど、さまざまに趣向を凝らした出で立ちの男女が集団で踊躍する踊りである。[11]村山修一・小笠原恭子・守屋毅・山路興造・河内将芳氏らの諸研究に拠れば、風流踊は、京都では十五世紀後半から姿を見せ始め、十六世紀に入ると武家衆、公家衆、町衆がそれぞれに踊りの集団を組織して、互いに近隣の町々や公武の邸に踊りを懸けたり返したりしあうという盛況ぶりであった。現存最古の洛中洛外図である旧町田家本（図6）や狩野永徳原画という東京国立博物館所蔵模本本（図7）、永徳筆の上杉本（図8）といった初期の洛中洛外図屏風に、揃いの笠や衣装を身に纏った人々が辻に出て、囃子のまわりで躍っている風流踊の場面が描かれるのは、そうした流行の世相を反映するものである。

いま本屏風の風流踊を見ると、踊りの集団は前掲十六世紀の洛中洛外図屏風に描かれた風流踊とは比べものにならないほど大規模なものとなっている。今踊りの輪に加わっている人数を数えてみると、白帷に腰巻・前掛け姿の揃いの装束を着た「外踊り衆」（図9）が二十五人、思い思いの華美な衣装を身に纏った「中踊り衆」（図10）が四十人と、総勢六十五人もの大集団となっている。「中踊り衆」の中には、囃子方として太鼓を打つ者が三組六人（図11）、鼓が五人、笛が二人いるほか、白布で覆面し小ぶりな南蛮笠を持って跳ねる者（図12）、瓢箪を腰につけ御幣を振って踊る者（図13）、切立烏帽子を被り紅い羽織を着て団扇を手に躍る者、カルサンを履き南蛮人の仮装をした者（図14）などが混じっている。「外踊り衆」が揃いの衣装を着け同じ身振りで踊るのに対して、「中踊り衆」は衣装も踊り方にも拘束がないようで、各人が思い思いの小袖を着、金の団扇を持って実に楽しげに自由に跳ね回っている。風流踊の踊り手は、色とりどりの華やかな衣装ゆえに女性と思いがちだが、囃子方と仮装人は全員男性であり、外踊り・中踊り衆にも髭を蓄えた男性が多数いて、男女混成の舞踊集団であったことがわかる。それにしても何という豪華な出で立ちの風流踊であろう。画家は、衣装の文様に金泥をふんだんに使って、金銀金襴緞子唐織紅梅といった衣装の美麗を表現しようとしているようだ。

では、この風流踊の大円舞が行われている場所はどこであろうか。従来の「大英本」の解説を振り返ってみると、武田恒夫氏は

・「一見、内裏を思わせるような宏壮な公家の邸内である。御殿には、公家の一群や被衣の上臈たちが、それぞれ欄干をめぐらした縁上から踊りを観覧している」（文献1）

・「左方にとある公家の広壮な邸宅を設定し、右半分にはその門前を思わせる町並みが水平に軒をつらね、上方にも別の町並みが配されている。・・・（中略）・・・季節は、桜柳によって春と知られるが、内裏を思わせる御殿では、庭前で華麗な風流踊がくりひろげられている」（文献2）

・「・・・ころは桜咲く春の季節であり、公家の邸へ伺候した地下人たちによる風流踊を描いたものと思われる」（文献3）

と、「公家の邸」としながらも、いっぽうで「内裏を思わせる」という形容を随所で使っておられる。推測するに、内裏かもしれないという思いがどこかにあったのであろう。この武田氏の見解は、松平進氏の解説にも継承されていて、

・「風流踊りは優雅に軒を連ねた広壮な貴人の邸内で催されている。あるいは内裏を念頭において構図を整えたのかもしれない。」（文献4）

と、「貴人の邸内」としながらも、内裏を念頭においているのではないかと記されている。

これに対して、成澤勝嗣氏は、

・「季節は桜咲く春。とある公家邸の前庭で、華麗な衣で着飾った風流踊りの一団が、輪舞を披露している。・・・（中略）・・・風流踊りといえば、豊臣秀吉七回忌の豊国臨時祭礼におけるそれが有名だが、このときも各町組は内裏まで参入して、天皇や公家衆に踊りを披露に及んでいる。本図の場合、中心となるべき風流傘や仮装はなく、規模としては比較的小さいようだが、同様の趣向によるものとも考えられる。町衆の風流踊りが公家邸へ参入するという図式は、寡聞にして他例を知らず、両者の交歓がテーマかとも想像するが、いま一つ主題の意図するところが判然としない。」（文献5）

と、わざわざ慶長九年八月の豊国臨時祭礼時に町衆の風流踊が内裏に参入したことに触れながらも、「大英本」の場は、「とある公家邸の前庭」と解釈する。そして、奥平俊六氏も、

・「画面右半に商店の立ち並ぶ繁華な町筋を描き、左半に二重の門のある広壮な貴顕の邸宅を描く。・・・（中略）・・・本図に描かれた場所は、おそらく上京の公家町のどこかであろうが、特定できない。」（文献6）

と、公家の邸だが特定できないとする。

このように、これまでの「大英本」の解説では、一様に風流踊が参入したのはどこかの公家の邸とする。それは、何よりも檜皮葺の御殿の庇で踊りを見物する男女が公家の装束を着しているからなのだと思うが、結論を言えば「大英本」に描かれたような、檜皮葺の立派な御殿が三棟もあり（背後にさらに数棟の柿葺と檜皮葺の御殿が見える）、かつ正殿の真正面、すなわち南面にかような立派な檜皮葺の唐門（図15）を開いている邸宅は、公家の邸宅などではなく、内裏以外にはありえないのである。もちろん「大英本」の建築描写にはデフォルメがあり、航空写真のように正確に描いているわけではないのだが、画家の意識の上ではまちがいなく内裏のつもりで描いている。

そもそも京都では、内裏ですら、豊臣秀吉が造営した天正度造営内裏（天正十九年完成）までは、南に門は作られなかった。それは

中世の里内裏の伝統に則るもので、旧町田家本・上杉本・東博模本等の十六世紀の洛中洛外図に描かれた内裏を見ても、南側は築地塀がまわるのみで門は開かれていない。[12] そのことは将軍邸などの武家の住宅でも公家の邸でも同様で、正門を南門に造らないという不文律があった。

ところが、徳川家康が造営した慶長内裏（慶長十九年完成）以降の近世内裏では、紫宸殿の南庭向こうの築地の中央（すなわち紫宸殿の中心線上）に、内裏の正門として南御門が造られるようになった。[13] このことは内裏の工事を担当した幕府大工頭の中井家に遺る指図から明らかであり、それはまた慶長末年から元和以降に制作された洛中洛外図の内裏描写にも反映されている。たとえば舟木本（東京国立博物館）、旧池田家本（林原美術館）などの、慶長内裏を描いた洛中洛外図を見ると、南の瓦葺きの塩築地の中央に立派な唐門が設けられているし、サントリー美術館本では、後水尾天皇の寛永行幸の鳳輦がまさにこの南御門から出るところを描いている。[14] こうしたことから、「大英本」は、南築地の檜皮葺きの唐門によって、慶長内裏以降の内裏を念頭において描かれているということになる。それはまた、「大英本」が、慶長内裏が完成をみた慶長十九年（一六一四）以降に制作されたものということでもある。

三、「大英本」の風流踊のモデル

では、「大英本」は、いつの風流踊の内裏参入を描いているのであろうか。

それを読み解く鍵のひとつは、「大英本」に描かれる風流踊が、武士の奉公衆や公家の若者の編成集団ではなく、中年と若輩が混じった町衆の男女による踊り集団であること。ふたつめは、先にも触れた右側の商家と踊りとの関連、三つ目は踊りを見物する高貴な人々が、三棟の檜皮葺の御殿に分かれていて、その中央の、紫宸殿とおぼしき建物の階に小さな親王とおぼしき人物がいることである。[15]

風流踊が禁裏に参上した例としては、古くは天文十年（一五四一）七月十六日の細川右京大夫晴元張行の踊（拍子物）、天文二十二年七月二十日の吉田衆・下京衆・室町衆の参入があるほか、[16] 天正十三年二月の院御所の築地築きにも錦繡奇羅をまとった上下京の町人が囃子にでて、それを多くの見物衆が見守ったこと知られるが、[17] 何と言っても当時の人々の記憶に新しいのは、慶長九年（一六〇四）八月の豊臣秀吉七回忌の豊国社臨時祭において催された、上京衆・下京衆総勢五百人からなる風流踊であろう。その華麗と熱狂ぶりは、豊国神社本や徳川美術館本の「豊国祭礼図」からよく知られるところだが、この踊りは、豊国社門前での踊り披露の前後に相次いで宮中に踊りを見せに参上しているのである。そのときの様子は、『御湯殿上日記』『慶長日件録』『時慶卿記』『義演准后日記』『言経卿記』の慶長九年八月十五・十六日条に詳しいが、[18] 踊りは紫宸殿の庭で披露され、後陽成天皇以下、女院（後陽成天皇生母・新上東門院）、政仁親王（のちの後水尾天皇）など大勢の皇族や門跡衆・堂上衆、地下衆が観覧したことが知られる。

「大英本」には、庭の周辺に満開の桜が描かれている（図16）から、この時の風流踊と違うと見る方もあるだろうが、小規模な公家衆の

踊りやヤヤコ踊り（かぶき踊り）が、女院や女御（後陽成天皇妃・近衛前子）の御所に参ることはちょくちょくあっても（前年慶長八年にも何度かある）[19]、このような大規模な風流の催しは、慶長九年八月十五・十六日の豊国臨時祭礼の時しかないのである。もし「大英本」が、慶長九年から何年か経ってから、余り記録性にとらわれることなく制作されたのであれば、同じ時期にしばしば女院御所で催されていた観花の御宴とあわせて記憶にとどめるべく、風流踊に桜を添えて描くこともあり得たのではないか。見物衆（図17）のなかに描かれる小さな男児は、当時八歳であった政仁親王（のちの後水尾天皇）とみて年格好も合っているし（紫宸殿に出御され天皇は、建物の中から御覧になった）、紫宸殿[20]を含めて三棟の御殿が描かれるのも、男子皇族と女院、女御の取り巻きがグループに分かれて観覧した（図18、19）ことを示しているように思うのである。

ところで、八月十五日の上京・下京衆の踊り上覧に先立って、亀屋栄任という徳川家康と深いつながりのあった上京下立売町（別名永仁町）の呉服商が、自分の興行する躍を女院御所にお目に懸けにいく出来事があった。それは、

『御湯殿上日記』慶長九年七月廿三日条の

「はるゝ。たちうりのゑんにんと申候物（ママ）、女院の御所へおとり御めにかけまいらせ候とて、御所にもならします。御所〳〵もなる。まき。くもしなとまいらるゝ。ひし〳〵なり。」

や『慶長日件録』同日条の

「・・・今晩亀屋栄任躍興行、下立売衆五十許不残相催云々。預他適之間不見物。美麗盡金銀云々。」

『時慶卿記』同日条の

「女院御所へ永仁町ヨリ躍懸御目。午刻ニ参。堂上内々被召衆斗、外様ニハ阿野ト予斗也。金銀ヲ盡タル出立也。中躍五十人斗・棒持百斗、銀ノ笠捧也。躍後殿上ニテ各ニ御酒ヲ被下、半ニ予ハ罷出。」

から知られるものである。栄任の仕立てた踊りは、豊国祭礼では「下立売組」として編成されているのだが、栄任は踊りの仕上がりぶりをまずもって女院に御覧に入れたのだ。これについて小笠原恭子氏は、栄任が踊上覧にかこつけて芸能好きの女院に接近したと見、「家康の命で千姫婚礼の呉服調度を調えた栄任にとって、女の城である後宮への接近は、五十人に金銀を尽くしたいでたちをさせ、銀の棒百本を作ってもなお、その入費をはるかに超える見返りが期待されていたのではあるまいか」と[21]、のちの雁屋と東福門院の関係を髣髴させるような意図をよみとっている。

この亀屋栄任（？～一六一六）については、工藤敬一氏の「近世初頭の一特権町人像――亀屋栄任について――」（『日本歴史』一三三　一九五九年）の研究があり、「呉服師由緒書」に書かれた栄任の伝記等から、父祖は丹波の比隅を知行する地侍で、織田信長の丹波攻めで浪人になったのを機縁に上洛、上京の下立売に住んで商業に従事した人物とされる。その後、栄任は、早く徳川家康の知遇を得てその側近となり、呉服商として財を成し大きな成功を収めて茶屋四郎次郎、後藤庄三郎とならぶ政商となった。家康は上洛時には、栄任の立売の家に滞留するほど両者の関係は緊密で、栄任は家康の装束を調えたり、京都の情報を集めて伝達する役割を負って

いたようである。また『本光国師日記』に記録されている南禅寺の金地院崇伝との頻繁な書簡の往復が示すように、京都の社寺行政にも大きく関わっていた。当時の京都で栄任の持っていた力は絶大であった。

四、亀屋栄任と狩野内匠

ところで、『古画備考』の狩野門人譜には、狩野松栄門人として狩野宗心という画家についての系譜がある。

松栄門人狩野宗心　一本永徳重信門人、内匠助種永、一作宗進、始甚十郎

由緒書　元祖亀屋忍弟（ママ）、狩野内匠助、権現様江御目見仕、御画御用相勤申候、慶長十五戌年十月六日頂戴之口宣ニ藤原種永任内匠助ト御座候、駿府御城江御供仕、

御画御用相勤申候、

一本慶長十三申正月、御目見、同十五戌年十月六日、改内匠助、元和六申年正月廿一日死、年五十三

その由緒書によれば、狩野宗心は亀屋忍（永の字脱カ）の弟で内匠助を称し、東照大権現徳川家康にお目見えのうえ駿府にも呼ばれて御用を勤めたという。また所載系図に拠れば、この種永の家系は、内匠種信、左近種次、大学氏信と続き、いずれも徳川将軍にお目見えして、築地小田原町狩野という表絵師の画系として幕末明治まで続いたことが知られる。

狩野の直系でも婿でもないのに、表絵師という格式ある画系を形成するには、いくら家康お気に入りの政商の弟であっても、それなりのレベルの作品を描ける技量がなければ無理だと思われる。にもかかわらず、今日この種永の遺作はほとんど知られておらず、松本の戸田子爵家の売立に出た故事人物図（『日本屏風絵集成　第十五巻　屏風絵大鑑』所載）くらいしか私も知らない。どうやら内匠の絵は、慶長期の狩野派作品の中に埋もれているようなのである。

ただ、『本光国師日記』や『鹿苑日録』などの文献史料では、狩野内匠とその三人の息子の記事がかなり頻繁に出てくる。崇伝は、栄任だけでなく、内匠とも頻繁に書状のやりとりをしており、駿府から飛脚を上げる折には栄任と内匠双方に送っているから、二人はおそらく近所に住まいを持っていたのだろう。そのなかでも、『鹿苑日録』の慶長十八年（一六一三）には、内匠が甚十郎・橘十郎・喜兵衛という三人の息子をつれて、相国寺の鹿苑院主昕叔顯晫を訪問する記事がしばしば見られる（八月六日・七日条、九月十七日条）。当時相国寺の諸塔頭は、慶長内裏の障壁画制作を行っている絵師達の仕事場となっており、棟梁として狩野派絵師を統率している狩野孝信や右京、宗徳なども鹿苑院主に招かれている。ということは、内匠もまた慶長内裏で制作する画家だったということである（内匠の子内匠甚十郎は寛永内裏で制作している）。

ずいぶんまわりくどい言い方を重ねてきたが、私は「大英本」が、狩野孝信筆とされる洛中洛外図屏風（吉川観方旧蔵、福岡市博物館（図2））と、非常に似た構図やモチーフ、人物描写をもつことと、亀屋栄任が慶長九年の風流踊の興行に大きな関わりを有した事実と、内匠が栄任の弟だという事実を結びつけて考えてみたいのであ

る。先の戸田子爵家から出た故事人物図のほっそりしたきゃしゃな人物描写と「大英本」のそれが矛盾しないのも傍証にはなろうか。

慶長九年に風流踊が参入した時の内裏は、まだ天正内裏で、現実には南に唐門は建っていないのだが、内匠は自分が障壁画（図16）制作に関与した新しい内裏を舞台にして（孝信の洛中洛外図の内裏には南に門は描かれていない）、回顧的に栄任の催した下立売町衆による華麗な風流踊を描いたのではないだろうか。慶長後半になると、京都でも風流踊の張行はあまり行われなくなり、禁中にはかわってかぶき踊りや伊勢踊りなどが参上してその芸能を見せることはあっても、大規模な風流踊が参上することはなくなっていた。おそらくこの屏風の制作を依頼した人物は、あのときの踊りの熱狂を知っていて、それを懐かしんでいる人物だったのであろう。それが栄任なのか、女院なのか、武家なのか、今はわからないが、今後私の小論をたたき台にして、新しい見解が次々に出されることを切に望んで結びとしたいと思う。

註

（1）文献1．武田一九六九

（2）文献2．武田一九七七では「野外遊楽図（洛中風流踊図）」、文献3．武田一九七九では「洛中風俗図」と呼んでいる。但し、近年でも『日本美術全集第十五巻　永徳と障屏画』（講談社　一九九一年）では、「免税踊り図屏風」の名を採っている。

（3）文献4．松平一九八七

（4）文献6．奥平一九九二

（5）文献7．竹内一九九六

（6）踊りの掛け合いについて、小笠原恭子氏は、『出雲のおくに』（中公新書七三四　一九八四年）の中で、「踊は、疫神を自己の領域の外に送り出す呪術であるのだから、踊を掛けられるということは、その疫神をもちこまれたことにもなる。したがって掛けられた踊は、かならず掛けかえさなければならなかった」のだと述べている。

（7）『日本屏風絵集成　第十五巻　屏風絵大鑑』所載の売立目録にある古土佐筆「祭礼踊図」は、二曲一隻の、より大きい屏風の断片かと思われる作品だが、「大英本」によく似た形式の「平唐門」のある屋敷の庭で風流踊が行われており、それを邸内から見物する人々も描かれている。宮中参入の風流踊を描いたものかもしれない。屏風の出現を待ちたい。

（8）守屋毅「洛中の風流踊」（『芸能史研究』五四　一九七六年）

（9）千鹿野茂『日本家紋総監』（角川書店　一九九四年）

（10）武田氏は、右隻には「社寺もしくは武家を舞台とする祭礼あるいは年中行事が描かれていた公算が大である」とする（文献1．武田一九六九）。

（11）風流踊に関する研究は非常に多いが、筆者は本稿をなすに当たり次の文献から多くを学んだ。

村山修一『日本都市生活の源流』関書院　一九五三年

守屋毅「洛中の風流踊」（『芸能史研究』五四　一九七六年）

守屋毅『「かぶき」の時代』角川書店　一九七六年

小笠原恭子『出雲のおくに』（中公新書七三四　一九八四年）

小笠原恭子「かぶきの成立」（芸能史研究会編『日本芸能史』第四巻　中世～近世　法政大学出版局　一九八五年　所収）

山路興造「風流踊」（芸能史研究会編『日本芸能史』第四巻　中世～近世　法政大学出版局　一九八五年　所収）

河内将芳「十六世紀における京都「町衆」の風流「踊」」（『芸能史研究』一三〇　一九九五年）

（12）藤岡通夫『京都御所』彰国社　一九五六年

（13）（12）および平井聖編『中井家文書の研究　第一巻』（中央公論美術出版

一九七六年）

（14）各洛中洛外図屏風の図版については、『都の形象（すがた）　洛中・洛外の世界』展図録（京都国立博物館　一九九四年）を参照されたい。

（15）松平進氏は、文献4で「・・・蔀戸をあげ、緑の御簾の前の廊に、勾欄を前にして座し、踊りを見物する公家衆。子供もまじえて、女は被衣、男は直衣姿。中央部、階の際までのり出すようにしている少年がこの日の主賓であるらしい。階の下には緋毛氈などを敷いて武士や裏頭（かとう）の僧、稚児、そして一般の男女が坐って踊りを凝視する。」と、この少年が見物衆の中心であるという示唆にとむ指摘をしている。

（16）守屋毅「洛中の風流踊」（『芸能史研究』五四　一九七六年）、山路興造「風流踊」（芸能史研究会編『日本芸能史』第四巻　中世～近世　法政大学出版局　一九八五年　所収）

（17）『言継卿記』天正十三年二月十七・十八・十九・二十・二十五日条など。

（18）『御湯殿上日記』慶長九年八月十五日条

「はるゝ。とよくにのりんしのまつりに、かみきやう下きやうより、おとりしゝてんの御にわにておとり御めに御かけあり。女院の御所。宮の御かた。御かつしき御所。やゝ御所。いりゑ殿。このえ殿。大かく寺殿。一てう院殿。しやうこ院殿。二のみやの御かた御けんふつあり。はてゝく御まいる。たいの物にてくもしまいる。とさま。ない〳〵のおとこたちもしこう。はてゝまきにてくもしまいる。あなたの女中しゆうもみな〳〵御まいり。」

『慶長日件録』慶長九年八月十五日条

「晴、今日為豊国祭礼、上下京地下人催風流、上京より三百人、下京より二百人、都合五百人、一様ニ持作花、箔生帷、美麗驚目者也。禁中へ懸御目、於紫宸殿被御覧也。」

『時慶卿記』慶長九年八月十五日条

「豊国ノ跳　禁中へ参、堂上不残伺候候、先小川組・西陣上立売一連也、其次台町（室）中筋組也、其次六。町也、下京ハ晩ニ跳参候。」

『義演准后日記』慶長九年八月十五日条

「・・・巳半剋上下京風流、笠ホコ一本ツゝ搆之、踏衆五百人云々、紅ノ生絹ニ金薄、或亀ノコウ、或雲立涌、或カコ、或段々ノ躰也、笠ハ金銀ニ皆タミ。結花ニテカサリ、扇金銀、帯・草鞋ニ至マテ紅・金銀也、僮僕五人・十人ツゝ召具、思々出立、是モ金銀ノダミ物著用、一物ニハ四天王、或唐人、或大黒・エヒス・高野聖ノヲイ、アラユル一興ノ躰也、鼓・大鼓以下笛ハヤシノ躰也、難盡筆舌」

『言経卿記』慶長九年八月十五日

「一、禁中へ、豊国社へ参上京町人風流参、兼日可参之由也、相番衆ヘモ可相觸之由有之間、各被参了、門跡衆・攝家衆　御参也云々、紫震殿へ御見物ニ　出御也、簀子堂上衆見物了、風流已後清涼殿東ノ間ニテ酒被下了、長橋殿・官女・末物衆　出合了、今日参仕衆者、西園寺大納言・日野大納言・日野前大納言・廣橋大納言・花山院大納言・万里小路大納言・予・菅中納言・中山中納言・葉室中納言・中御門中納言・新中納言・伯二位・藤宰相・平宰相・六条宰相・新宰相・三条宰相中将・鷲尾宰相・大炊御門三位中将・竹丸・千壽丸・光廣朝臣・爲治朝臣・氏成朝臣・實久朝臣・重定朝臣・實顯朝臣・秀直朝臣・忠長朝臣・隆昌朝臣・・・（中略）

一、禁中へ下京町人風流参了、内蔵頭参　内了、堂上衆大略被参了、予草臥之間、不参了、

同　八月十六日条

「一、六町々風流女院へ参也云々、可参之由有之、遅々、不参了」

『御湯殿上日記』慶長九年八月十六日

「はるゝ。けふも御ふるまいあり。女院の御所。宮の御かた。八てう殿。大しやう寺殿。二の宮の御かた。やゝ御所ならします。く御まいる。六てうまちより女院の御所へおとり御めにかけ候て、みな〳〵御けんふつになる。この御所よりとよくにて御かくらおほせつけらるゝ。ふ行とうのう大弁。くけしゆう。しけのしゆういつものことくまいりて、こよひ御かくらあり。」

（19）慶長八年五月六日、六月十一日、七月二十六日条。

（20）現存する寛政度の紫宸殿には向拝が付いていないが、慶長度の紫宸殿には「大

英本」のような唐破風ではないが向拝が延びていた。

(21) 小笠原恭子『出雲のおくに』(中公新書七三四　一九八四年)

大英博物館所蔵「洛中風流踊図」を扱った文献

文献1. 武田恒夫「洛中風俗図」解説(『在外秘宝　障屏画・琳派・文人画』学習研究社　一九六九年)

文献2. 武田恒夫「野外遊楽図(洛中風流踊図)」解説(『日本屏風絵集成　第十四巻　風俗画　遊楽・誰ヵ袖』講談社　一九七七年)

文献3. 武田恒夫「洛中風俗図」解説(『在外日本の至宝　障屏画』第四巻　毎日新聞社　一九七九年)

文献4. 松平進「洛中邸内風流踊図屏風」解説(栖崎宗重監修『秘蔵浮世絵大観　第一巻　大英博物館I』(講談社　一九八七年)

文献5. 成澤勝嗣「免税踊り図屏風」解説(『日本美術全集　第十五巻　永徳と障屏画』講談社　一九九一年)

文献6. 奥平俊六「風流踊を描く絵画」および「洛中邸内風流踊図屏風」解説(栖崎宗重監修『秘蔵日本美術大観』第一巻　講談社　一九九二年)

文献7. 竹内美砂子「洛中邸内風流踊図屏風」解説(千葉市美術館・福島県立美術館・名古屋市博物館編「大英博物館　肉筆浮世絵名品展」図録　一九九六年)

川本桂子(かわもと・けいこ)

一九七四年　東京大学文学部美術史学科卒業

一九八〇年　東京大学大学院人文科学研究科単位修得満期退学

その後、群馬県立女子大学助手、

北海道教育大学・藤女子大学・神戸大学非常勤講師などをへて

現在、近畿大学非常勤講師、大津市文化財保護審議会専門委員

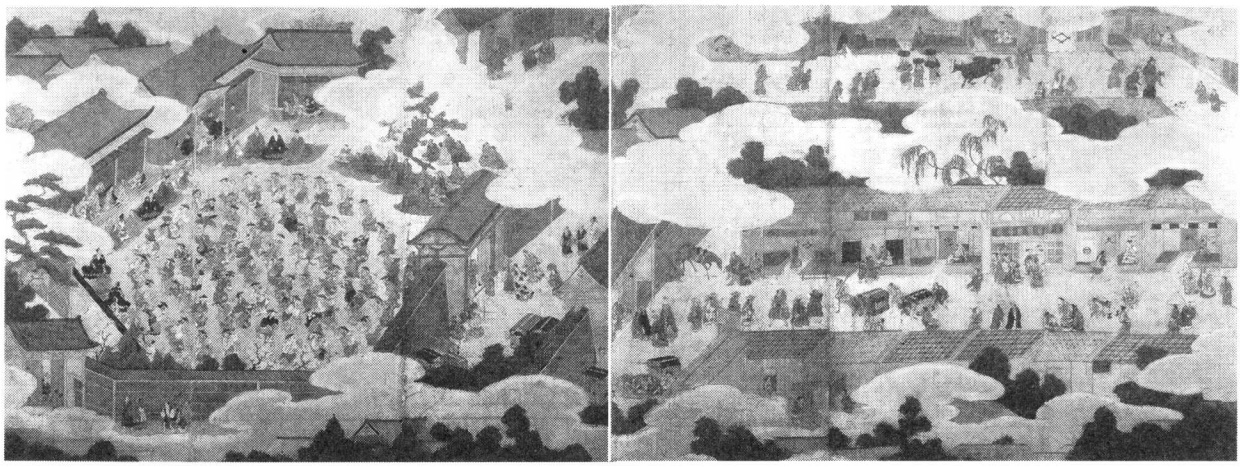

図１　洛中風流踊図屏風　　大英博物館

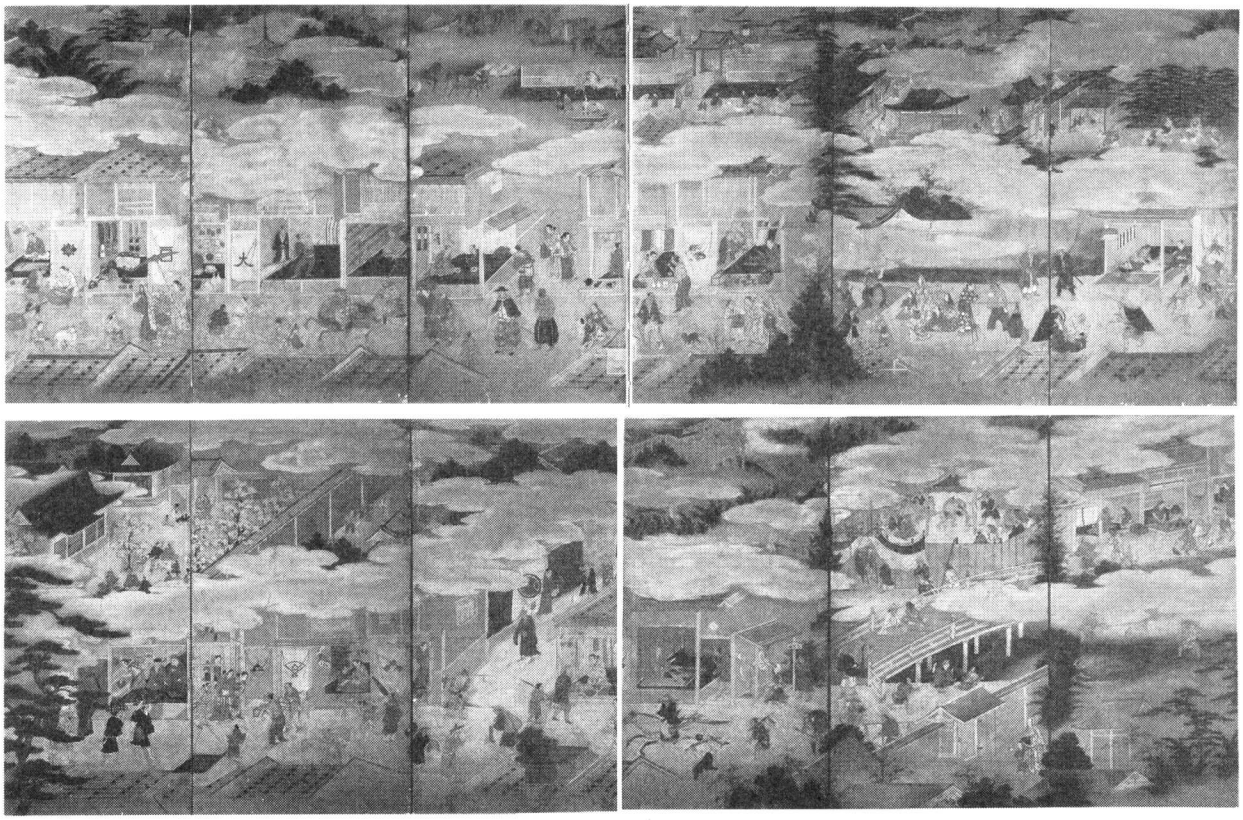

図２　狩野孝信筆　洛中洛外図屏風　　福岡市博物館

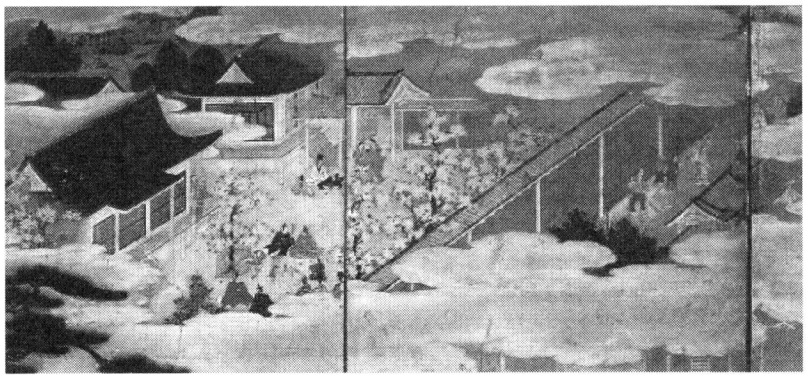

図 20　狩野孝信筆　洛中洛外図屏風（内裏の部分）　福岡市博物館

図３　洛中風流踊図屏風（左３扇分）

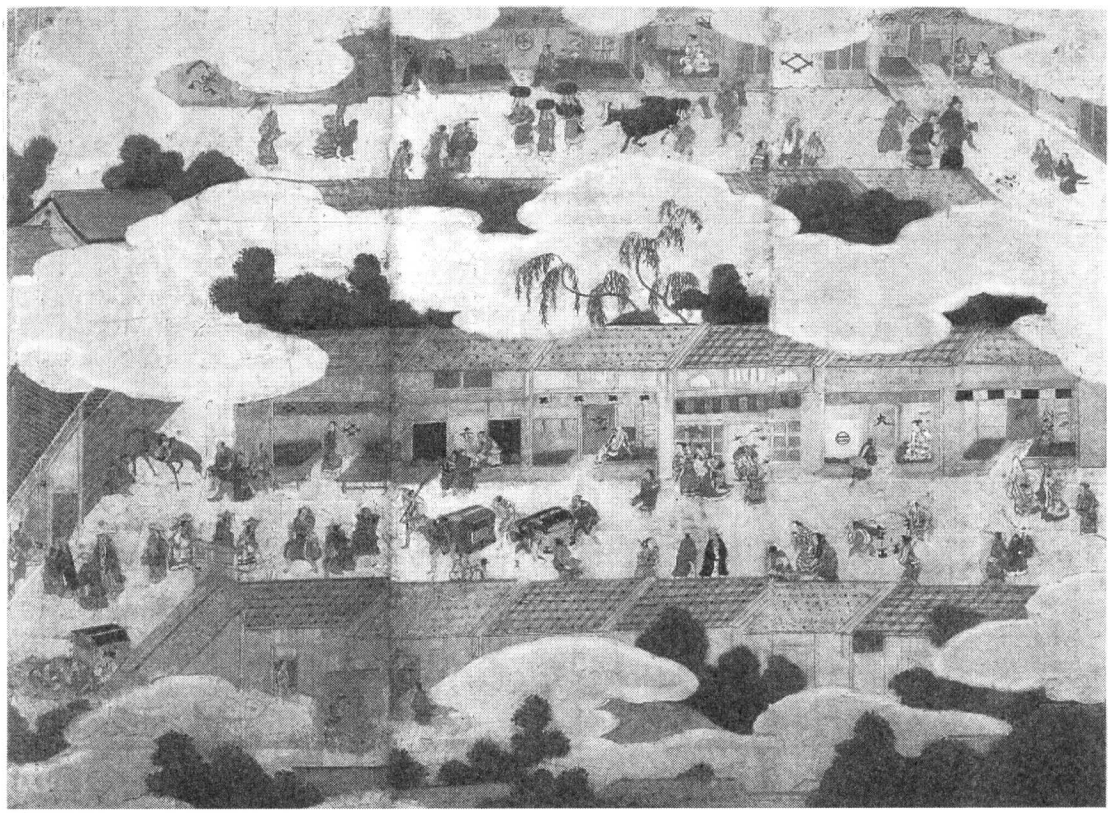

図４　洛中風流踊図屏風（右３扇分）

図５　洛中風流踊図屏風　風流踊と見物衆

図６　盂蘭盆会念仏風流
（旧町田家本洛中洛外図屏風）

図７　風流踊
（東京国立博物館模本洛中洛外図屏風）

図８　風流踊
（狩野永徳筆上杉本洛中洛外図屏風）

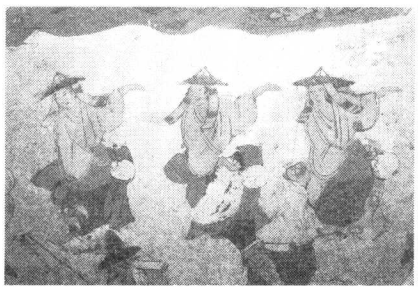

図９　外踊り衆

図１０　中踊り衆

図１１　中踊り衆　太鼓打ち

図 12　中踊衆　南蛮傘

図 13　中踊衆　御幣持ち

図 14　中踊衆　南蛮風俗

図 15　南の唐門

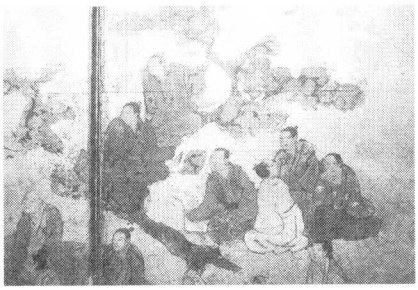

図 16　桜と地下の見物衆

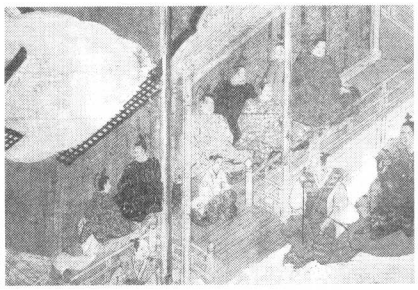

図 17　紫宸殿縁にて見物の親王・皇族方

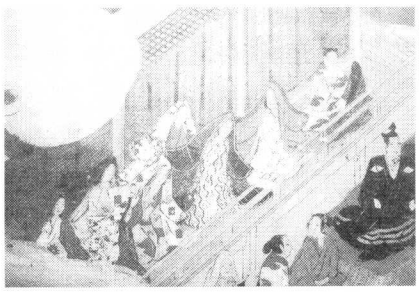

図 18　見物の女房衆

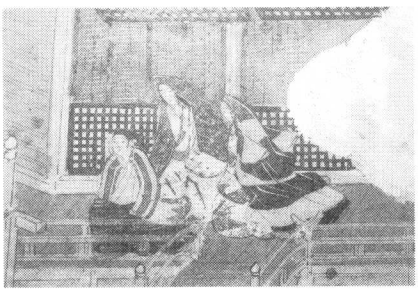

図 19　見物の女院